広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	平安時代の物語作品における子どもの言葉 ： 動詞の語彙に着目して
Author(s)	石田，芽衣
Citation	論叢 国語教育学 , 19 : 34 - 46
Issue Date	2023-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/54976
URL	https://doi.org/10.15027/54976
Right	
Relation	

平安時代の物語作品における子どもの言葉―動詞の語彙に着目して―

石田　芽衣

一　研究の目的

この研究は、平安時代の物語作品に見られる子どもの言葉遣いの特徴を明らかにし、平安時代における役割語の存在の可能性を探ることを目的とする。

役割語について、金水(二〇〇三)[1]は以下のように定義している。

ある特定の言葉遣い(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。

例えば、「わしの出番はまだかのう?」という発言を聞いた時、多くの人が「わし」という一人称や「のう」という文末表現から、白髪の老人が発話者であると想像するだろう。このように、特定の人物像と結びついている言葉遣いが役割語である。

現在、役割語の研究は、金水(二〇〇三)以来、着実に進められている。しかし、西田(二〇一六)[2]が指摘するように、役割語研究は江戸時代後半以降の近代や現代が中心となっており、古代や中世についてはまだ検討が進んでいない。

西田(二〇一六)は、平安時代の和文作品における「役割語」の存在の可能性を指摘しており、「子どものことば」については、「子どもの会話文は、用語も難解ではなく、構文的にも複雑なものではない」[3]と述べている。

また、森野(一九六八)は子どもの言葉遣いについて、「破格的表現が目立つ」[4]「一般の言い方に比べて、その音の一部を脱落させたような言い方がしば〳〵現れる」[5]と指摘している。

これらの研究をうけて石田(二〇二一)は、『うつほ物語』と『源氏物語』の待遇表現について調査し、どちらの作品も子どもと大人の言葉は書き分けて表現されていることから、平安時代においても、子どもの役割語が存在している可能性を指摘した。特に、『源氏物語』については、「二作品に共通して表れていた待遇の種類の少なさだけではなく、不適切な待遇表現でも子どもらしさを表現しており、『うつほ物語』よりも『源氏物語』の方が、大人と子どもの言葉を書き分ける表現意識が強い」[6]と述べている。

しかし、これらの観点だけでは、子どもの言葉の特徴を明らかにできたとは言い難い。そこで動詞の語彙に着目し、平安時代の物語

作品に見られる子どもの動詞の語彙にどのような特徴があるのか、明らかにしたい。

二　研究の方法

平安時代の作品における「子ども」と「大人」の発言を比較して分析を行う。

対象作品は、「子ども」の発言が多数存在する『うつほ物語』と『源氏物語』とし、テクストは、『新編日本古典文学全集』による。

対象の発言は、作品内で「子ども」と思われる人物の発言とし、比較対象は、『源氏物語』の「大人」である「紫の上」「匂宮」「惟光」と、『うつほ物語』の「仲忠」の発言とした。

ここでの「子ども」の定義は「成人していない十三歳以下の人物」としており、ここからさらに、数え年で「一歳から六歳」「七歳から十三歳」に分けて考える[7]。成人前であっても、年齢が明記されていない子どもについては、研究対象に含まないこととする。

また、「大人」の発言のうち、「大人から子ども」への発言は、子どもに近い言葉遣いになることが予想されるため、「大人から大人」の発言を「大人」の発言とし、「大人から子ども」への発言は含まないこととする。

『うつほ物語』の「仲忠」の幼少時代[8]については、本研究の成果として「大人」に近い言葉遣いをしていることが分かったため、「子ども」の発言には含めていない。

ここでの発言とは、会話として鍵括弧(「」)で囲まれているものとする。鍵括弧に囲まれていても、手紙の内容や心中語は発言に含んでいない。発言のなかに伝言等の他人の言葉が含まれている場合は、他人の言葉のみを対象から除き、それ以外を研究対象に含むこととする。

対象の発言を引用する際には、括弧書きで作品名、巻名、『新編日本古典文学全集』の巻数と頁数を合わせて示し、注目したい部分には傍線を付す。

「語彙」を分析するにあたって、「Web茶まめ」の「中古和文UniDic」を活用した。解析したデータにおいて、品詞や語彙素など間違いであると判断できるものについては、修正を加えている。

補助動詞の扱いについては、「Web茶まめ」で動詞との区別がないことや、「給ふ」「侍り」などの補助動詞で「子ども」と「大人」に差が出ることが予想されることから、今回の動詞の分析に含むこととする。

三　『うつほ物語』の動詞の語彙

『うつほ物語』で使用される動詞を年齢別に表したものが表1～3である。

表１　『うつほ物語』の1~6歳の動詞

順位	語彙素	語彙素読み	語種	度数	使用率
1	見す	ミス	和	5	14.71%
2	給ふ-尊敬	タマフ	和	4	11.76%
3	見る	ミル	和	3	8.82%
3	宣ふ	ノタマフ	和	3	8.82%
5	抱く	イダク	和	2	5.88%
5	隠す	カクス	和	2	5.88%
5	おはす	オハス	和	2	5.88%
8	す	ス	和	1	2.94%
8	有り	アリ	和	1	2.94%
8	罵る	ノノシル	和	1	2.94%
8	泣く	ナク	和	1	2.94%
8	落とす	オトス	和	1	2.94%
8	遊ぶ	アソブ	和	1	2.94%
8	留む	トドム	和	1	2.94%
8	率る	イル	和	1	2.94%
8	来	ク	和	1	2.94%
8	奉る	タテマツル	和	1	2.94%
8	出づ	イヅ	和	1	2.94%
8	行く	イク	和	1	2.94%
8	騒ぐ	サワグ	和	1	2.94%
総計				34	100.00%

表３　『うつほ物語』の大人の動詞

順位	語彙素	語彙素読み	語種	度数	使用率
1	侍り	ハベリ	和	415	11.91%
2	給ふ-尊敬	タマフ	和	390	11.19%
3	有り	アリ	和	200	5.74%
4	す	ス	和	147	4.22%
5	思ふ	オモフ	和	116	3.33%
6	見る	ミル	和	104	2.99%
6	聞こゆ	キコユ	和	101	2.90%
8	奉る	タテマツル	和	83	2.38%
9	参る	マイル	和	80	2.30%
10	給ふ-謙譲	タマフ	和	65	1.87%
11	物す	モノス	和	61	1.75%
12	成る	ナル	和	54	1.55%
13	候ふ	サブラフ	和	43	1.23%
14	言ふ	イフ	和	42	1.21%
15	おはす	オハス	和	41	1.18%
15	仕る	ツカウマツル	和	41	1.18%
17	思す	オボス	和	40	1.15%
18	罷る	マカル	和	35	1.00%
18	申す	モウス	和	35	1.00%
20	宣ふ	ノタマフ	和	33	0.95%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
216	触る	フル	和	1	0.03%
総計				3484	100.00%

表２　『うつほ物語』の7~13歳の動詞

順位	語彙素	語彙素読み	語種	度数	使用率
1	給ふ-尊敬	タマフ	和	15	16.13%
2	弾く	ヒク	和	7	7.53%
3	見る	ミル	和	5	5.38%
3	侍り	ハベリ	和	5	5.38%
5	奉る	タテマツル	和	4	4.30%
6	思ふ	オモフ	和	3	3.23%
6	す	ス	和	3	3.23%
6	泣く	ナク	和	3	3.23%
6	宣ふ	ノタマフ	和	3	3.23%
6	見ゆ	ミユ	和	3	3.23%
6	有り	アリ	和	3	3.23%
12	抱く	イダク	和	2	2.15%
12	詣づ	マウヅ	和	2	2.15%
12	居る	イル	和	2	2.15%
12	おはす	オハス	和	2	2.15%
12	知る	シル	和	2	2.15%
12	呼ぶ	ヨブ	和	2	2.15%
12	降る	フル	和	2	2.15%
12	寝る	ネル	和	2	2.15%
20	聞こゆ	キコユ	和	1	1.08%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
20	出づ	イヅ	和	1	1.08%
総計				93	100.00%

すべての年齢層に共通して見られた語の中で、語彙数の多い「大人」においても使用率が高い語として「給ふ」「有り」「す」「見る」「奉る」「おはす」「宣ふ」が挙げられる。これらは基本的な動詞であり、「子ども」が優先的に習得して用いる語であると考えられる。

「一～六歳」でもっとも使用率が高いのは、サ行下二段活用の「見す」である。これは、東宮の若宮たちが「仲忠」の子である「いぬ宮」を見せろと何度もねだっているからである。

①東宮の若宮たち(四、五歳)「宮の稚児見せよ、見せよ」

(『うつほ物語』蔵開　中②四八五頁)

②小宮(四歳)「見せたまはざりしかば、いみじう泣きしかばこそ見せたまひしか。抱きしかば、うち落として騒がれき」

(『うつほ物語』蔵開　下②五八五頁)

「一～六歳」で二番目に使用率が高い語は、「給ふ」である。このほかにも「宣ふ」や「おはす」などの尊敬語が上位に見られ、これらの語は幼い子どもが一番に習得して用いる基本的な敬語であることが分かる。「おはします」のような最高敬語や、「大人」で多く見られる「侍り」は、「一～六歳」では見られない。

謙譲語は六歳の「いぬ宮」の一例しか見られない。以下に、その場面を引用する。「いぬ宮」の発言には傍線を付し、謙譲語には二重線を付す。

大将、いぬ宮に聞こえたまふ、仲忠「弾かまほしくしたまふ琴、習はいたてまつらむを」とのたまふより、うれしと思して笑みたまへる、いとはなやかに、見まほしう、愛敬こぼるるばかりにておはすを、いとうつくしと見たてまつりたまふ。仲忠「琴習はせたまはば、宮には聞かせたてまつらでなむ習ひたまふべき。いと面白うをかしき所に率てたてまつりてむ。尚侍のおとどはおはしましなむや」とのたまへば、いぬ宮「さりとも、宮おはせではいかでか」とのたまへば、仲忠「いと口惜しく。さては不用に侍なり。人に聞かせで、仲忠、尚侍のおとどなむ、人に教へはべる。しばし念じたまひておはしませ。さてよく弾きたまふは、この侍る琴をなむさは弾きたまふ。これは異なり。人に聞かせつれば、声もせず、え習はず侍る。宮も二の宮もおはせじ所なり。いと面白なむ侍る」と聞こえたまへば、いぬ宮「さて、ちやはは」とのたまふは、中に思す御乳母なりけり。仲忠「それは、近う候ひなむ」。いぬ宮「さは、宮うらやましとのたまはむな」。仲忠「されど、声聞かぬほどにこそは侍りて、御乳欲しうおはしまさむほどは、ふとおはしまさせてむ」。いぬ宮「さて、なほ久しくや、宮は見たてまつらざらむずる」。仲忠「などてか。ただしばしなり」と聞こえたまふにも、いとあはれに、まつはしたてまつりたまへるに、稚児におはするは、こしらへてもおはしなむ、宮いかに思しのたまはすらむ、といとほしけれど、さるべきことならねばと思す。

(『うつほ物語』楼の上　上③四六九-四七〇頁)

この場面は、「仲忠」が娘である「いぬ宮」に対して、母と別居して琴を習うように説得する場面である。「いぬ宮」はここで「仲忠」の説得に納得しつつ、質問を重ねている。ここで、「いぬ宮」は謙譲

語の「奉る」を用い、さらに発言のすべてに接続詞を用いて発言している。謙譲語と接続詞は、他の「一～六歳」には見られない語であり、「七～十三歳」の段階で次第に用いるようになっていく語であることが考えられる。この場面では、普段よりもお利口な様子の「いぬ宮」を表現するために、謙譲語や接続詞を用いたのではないだろうか。

また、「一～六歳」は、「思ふ」「知る」「喜ぶ」のような「内的情態動詞」[9]を用いていないことが分かった。

「七～十三歳」では、尊敬の「給ふ」がもっとも多く見られ、「弾く」が二番目に多く見られた。「弾く」が多い理由としては、『うつほ物語』では琴を弾く場面が多いことが挙げられる。『うつほ物語』は、琴の名手であった「俊蔭」の子孫たちが登場し、「俊蔭」の琴の技が親から子へと代々受け継がれている。「弾く」を多用している「いぬ宮」も「俊蔭」のひ孫であり、六歳から母親の元から離されて「俊蔭娘」と「仲忠」から琴を教わるようになる。このような背景から、「弾く」が上位になっていると考えられる。

③いぬ宮(七歳)「否。遊びをこそあらめ。なほこれを、宮の弾きたまふやうに、月の見ゆるまでこそ弾かめ」

(『うつほ物語』楼の上 下③五一三頁)

④いぬ宮(七歳)「弾きつべし。宮などのやうに、傍らに置きて、常に今は弾きてむ」

(『うつほ物語』楼の上③五一五頁)

また、「七～十三歳」になると、「一～六歳」で見られなかった最高敬語の「おはします」や、「侍り」が見られるようになる。「侍り」は、杉崎(一九七一)が「かしこまりの語法」[10]の一つに数えており、使用場面については、「目上に対しかしこまり、また同等の者同志での、あらたまったいわば堅苦しい(時に公式の)もの言いの場であったらしいことは想像できそうに思う」[11]と述べている。このように、「侍り」は、相手の身分や場面によって使い分ける語であり、「一～六歳」が優先的に習得して用いる語ではなかったと考えられる。「七～十三歳」のような宮廷に出仕できる年齢になってはじめて、かしこまったもの言いが求められたのではないだろうか。

杉崎(一九七一)は、「侍り」のほかに「かしこまりの語法」として、下二段活用の「給ふ」「まかる」「まかり出づ」「まかづ」「まうでく」「申す」を挙げている。これらの語は、「一～六歳」だけでなく「七～十三歳」でも見られない。ここから「子ども」は、「かしこまりの語法」の語群の中では、まずはじめに「侍り」を習得することが考えられる。

⑤宮はた(八歳)「大将殿こそ。この父君、盗みしはべり。この御物みな取る」

(『うつほ物語』蔵開 下②五三五頁)

⑥小君(八、九歳)「さは、御膝に居て弾きはべらむ。ただ倒れにて侍り」

(『うつほ物語』楼の上 上③四二一頁)

⑦小君(八、九歳)「人に抱かれでは弾きはべらず」

(『うつほ物語』楼の上 上③四三二頁)

また、「七～十三歳」では、「一～六歳」で見られなかった「思ふ」「知る」「覚ゆ」「忘る」のような「内的情態動詞」が見られるようになっている。

⑧小君(八、九歳)「まろも思ひきこえむ」

(『うつほ物語』楼の上 上③四一三頁)

⑨いぬ宮(七歳)「まろをのたまへど、宮恋しく覚えたまふべかめり。母君も泣きたまふか」

（『うつほ物語』楼の上　下③五二三頁）

「大人」になると、「侍り」がもっとも多く見られるようになり、「侍り」以外の「かしこまりの語法」に挙げられている下二段活用の「給ふ」や「罷る」「まかづ」「まうでく」「申す」が見られた。最高敬語や「内的情態動詞」の種類もさらに増えており、これらの語は成長するにつれて習得していく語であることが分かる。

⑨仲忠(大人)「日ごろ思ひたまへつることをとり申しつるなむ、今宵の喜びにはべる」　（『うつほ物語』俊蔭①一二〇頁）

⑩仲忠(大人)「世の中に住みにくきものは、独り住みにまさるものなかりける。まかるところしはべらねば、里とてはただここになむ。立ちまかり苦しうしたまふところは、いとつきなき心地しはべればなむ」　（『うつほ物語』嵯峨の院①三二一頁）

⑪仲忠(大人)「内裏にては時々対面たまはするときはべれど、細かなることは聞こえさせずはべりつるを、いとうれしくもおはしましけるかな」　（『うつほ物語』俊蔭①一一九頁）

⑫仲忠(大人)「今だにかかる御琴ども、いかにあらむとすらむ。いでやかくものの覚ゆればや、人の誤りをもすらむ。限りなく思ひ忍べど、え堪ふまじくもあるかな」　（『うつほ物語』祭の使①五〇三頁）

これらをまとめると、『うつほ物語』の「子ども」の動詞の特徴は以下の通りである。

(1)「一～六歳」は、基本的に謙譲語が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(2)「一～六歳」は、最高敬語が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(3)「一～六歳」は、「侍り」などのかしこまった場面などで用いられる動詞は見られず、「七～十三歳」になると、「侍り」を用いるようになる。

(4)「一～六歳」は、「内的情態動詞」が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

四　『源氏物語』の動詞の語彙

『源氏物語』の動詞の使用率の高い語を年齢別に表したものが表4～6である。

表4　『源氏物語』の1~6歳の動詞

順位	語彙素	語彙素読み	語種	度数	使用率
1	宣ふ	ノタマフ	和	3	11.54%
1	おはす	オハス	和	3	11.54%
3	抱く	イダク	和	2	7.69%
3	給ふ-尊敬	タマフ	和	2	7.69%
5	乗る	ノル	和	1	3.85%
5	成る	ナル	和	1	3.85%
5	聞こゆ	キコユ	和	1	3.85%
5	見る	ミル	和	1	3.85%
5	寄る	ヨル	和	1	3.85%
5	行く	イク	和	1	3.85%
5	吹く	フク	和	1	3.85%
5	咲く	サク	和	1	3.85%
5	隠す	カクス	和	1	3.85%
5	散らす	チラス	和	1	3.85%
5	奉る	タテマツル	和	1	3.85%
5	思ふ	オモフ	和	1	3.85%
5	率る	イル	和	1	3.85%
5	立つ	タツ	和	1	3.85%
5	上ぐ	アグ	和	1	3.85%
5	勝る	マサル	和	1	3.85%
総計				26	100.00%

表５　『源氏物語』の7~13歳の動詞

順位	語彙素	語彙素読み	語種	度数	使用率
1	侍り	ハベリ	和	10	15.87%
2	寝る	ネル	和	5	7.94%
2	給ふ-尊敬	タマフ	和	5	7.94%
4	見る	ミル	和	3	4.76%
4	有り	アリ	和	3	4.76%
6	宣ふ	ノタマフ	和	2	3.17%
6	言ふ	イフ	和	2	3.17%
6	おはす	オハス	和	2	3.17%
6	書く	カク	和	2	3.17%
10	違ふ	タガフ	和	1	1.59%
10	着る	キル	和	1	1.59%
10	寄る	ヨル	和	1	1.59%
10	吹く	フク	和	1	1.59%
10	好む	コノム	和	1	1.59%
10	返る	カヘル	和	1	1.59%
10	思す	オボス	和	1	1.59%
10	申す	モウス	和	1	1.59%
10	たばかる	タバカル	和	1	1.59%
10	す	ス	和	1	1.59%
10	繕ふ	ツクロフ	和	1	1.59%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
10	承る	ウケタマワル	和	1	1.59%
総計				63	100.00%

表６　『源氏物語』の大人の動詞

順位	語彙素	語彙素読み	語種	度数	使用率
1	侍り	ハベリ	和	82	9.17%
2	給ふ-尊敬	タマフ	和	75	8.39%
3	有り	アリ	和	66	7.38%
4	す	ス	和	41	4.59%
5	見る	ミル	和	39	4.36%
5	思ふ	オモフ	和	39	4.36%
7	知る	シル	和	22	2.46%
8	言ふ	イフ	和	21	2.35%
9	聞こゆ	キコユ	和	17	1.90%
9	思す	オボス	和	17	1.90%
11	成る	ナル	和	16	1.79%
12	聞く	キク	和	15	1.68%
13	出づ	イヅ	和	14	1.57%
14	奉る	タテマツル	和	12	1.34%
15	参る	マイル	和	11	1.23%
15	物す	モノス	和	11	1.23%
17	渡る	ワタル	和	10	1.12%
17	給ふ-謙譲	タマフ	和	10	1.12%
19	成す	ナス	和	9	1.01%
20	来	ク	和	8	0.89%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
104	伸ぶ	ノブ	和	1	0.11%
総計				894	100.00%

すべての年齢層に共通して見られた語の中で、語彙数の多い「大人」においても使用率の高い語として「給ふ」「見る」が挙げられる。これらの語は基本的な動詞であり、子どもが優先的に習得して用いる語であったと考えられる。

⑬明石の姫君(四歳)「乗りたまへ」(『源氏物語』薄雲②四三四頁)

⑭匂宮(三歳)「人も見ず。まろ顔は隠さむ。なほなほ」

(『源氏物語』横笛④三六三頁)

「一～六歳」では、「宣ふ」「おはす」「抱く」「給ふ」が多く見られた。ここから、「宣ふ」「おはす」「給ふ」は、幼い子どもが初めに習得して用いる尊敬語であることが分かる。

「抱く」については、一見基本的な語に見えるものの、「一～六歳」にしか見られない語である。「抱く」は、抱っこをせがむ場面で用いられる語であり、幼い子どもに用いられやすい語であることが考えられる。

⑮匂宮(三歳)「大将こそ、宮抱きたてまつりて、あなたへ率ておはせ」

(『源氏物語』横笛④三六二頁)

⑯二宮(五歳)「まろも大将に抱かれん」

(『源氏物語』横笛④三六三頁)

謙譲語は、三歳の匂宮の一例しか見られない(用例⑮)。ただ、この「抱きたてまつりて」は、石田(二〇二一)[11]で「不適切な謙譲待遇にあた」り、「まだ敬語について理解が十分ではない匂宮の幼さを表現したもの」であるとしている。この結果から、『源氏物語』においても『うつほ物語』と同様に、謙譲語は「一～六歳」が使いこなす語ではないと考えられていたことが窺える。

また、『うつほ物語』と同様に、「おはします」のような最高敬語や、「大人」で多く見られる「侍り」、そのほかの「かしこまりの語法」である動詞も「一～六歳」では見られなかった。

加えて、『うつほ物語』では一例も見られなかった「内的情態動詞」が、「一～六歳」において「思ふ」の一例のみ見られた。以下、「思ふ」を用いた五歳の匂宮の場面を引用する。匂宮の発言には傍線を付し、「思ふ」には二重線を付している。

三の宮は、あまたの御中に、いとをかしげにて歩きたまふを、御心地の隙には前に据ゑたてまつりたまひて、人に聞かぬ間に、紫の上「まろがはべらざらむに、思し出でなんや」と聞こえたまへば、匂宮「いと恋しかりなむ。まろは、内裏の上よりも宮よりも、母をこそまさりて思ひ聞こゆれば、おはせずは心地むつかしかりなむ」とて、目おしすりて紛らはしたまへるさまをかしければ、ほほ笑みながら涙は落ちぬ。

紫の上「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つべかめれば立ちておはしぬ。とりわきて生ほしたてたてまつりたまへれば、この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはんこと、口惜しくあはれに思されける。（『源氏物語』御法④五〇二-五〇三頁）

この場面は、病気の紫の上の言葉に対し、五歳になった匂宮が涙を我慢しながら自分の気持ちを伝える場面である。この発言は、素直に抱っこをねだっていた用例⑭⑮の三歳の匂宮の発言と比較すると、発言量が多く待遇表現も適切であり、助詞「より」という比較表現を用いて紫の上を慕う気持ちを強調している。この発言や、素直に慕う気持ちを見せつつも紫の上に最後まで涙を見せないように振舞う姿から、幼いながらも三歳から成長した様子が感じられる。

この五歳の匂宮の発言以外に『うつほ物語』と『源氏物語』の「一～六歳」に「思ふ」を用いた例は見られない。そのため、この場面では三歳の頃よりも匂宮が成長した姿を描くために、三歳の段階では用いなかったであろう内的情態動詞を用いたのではないだろうか。

ただ、「一～六歳」の段階ではこのような例外は見られるものの、「大人」でよく見られるような思考内容を受けて「～と思ふ」と続く用法の「思ふ」は見られなかった。

⑰惟光(大人)「何か、さらに思ほしものせさせたまふ。さるべきにこそよろづのことはべらめ。人にも漏らさじと思うたまふれば、惟光下り立ちてよろづはものしはべる」

（『源氏物語』夕顔①一七六頁）

⑱紫の上(大人)「かくこれかれあまたものしたまふめれど、御心にかなひていまめかしくすぐれたる際にもあらずと、目馴れてさうざうしく思したりつるに、この宮のかく渡りたまへるこそめやすけれ。なほ童心の失せぬにやあらむ、我も睦びきこえてあらまほしきを、あいなく隔てあるさまに人々やとりなさむとすらむ。等しきほど、劣りざまなど思ふ人にこそ、ただならず耳たつこともおのづから出で来るわざなれ、かたじけなく心苦しき御事なめれば、いかで心おかれたてまつらじとなむ思ふ」

（『源氏物語』若菜上④六六頁）

「七～十三歳」では、「一～六歳」で見られなかった最高敬語の「おはします」や「侍り」が見られるようになり、「侍り」についてはも

っとも使用率が高かった。「侍り」は、「小君」が身分の高い「源氏」に対して用いている場面がほとんどであり、『うつほ物語』と同様に「七～十三歳」になると、目上の者に対してかしこまった話し方ができるようになっていることが分かる。

⑲小君(十二、三歳)「ものけたまはる。いづくにおはしますぞ」

(『源氏物語』帚木①九七頁)

⑳小君(十二、三歳)「などてか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなん」

(『源氏物語』空蟬①一二二頁)

先述したように、『源氏物語』の「七～十三歳」で主に「侍り」を用いているのは、「空蟬」の弟である「小君」である。

しかし、十歳の「紫の上」にも一例のみ「侍り」を用いている例が見られる。以下、その場面を引用する。「紫の上」の発言には傍線を富士、「侍り」には二重線を付す。

男君は、朝拝に参りたまふとて、さしのぞきたまへり。源氏「今日よりは、おとなしくなりたまへりや」とてうち笑みたまへる、いとめでたう愛敬づきたまへり。いつしか雛をしすゑてそそきゐたまへる、三尺の御厨子一具に品々しつらひすゑて、また、小さき屋ども作り集めて奉りたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。紫「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。源氏「げに、いと心なき人のしわざにもはべるなるかな。いまつくろはせはべらむ。今日は言忌して、な泣いたまひそ」とて、出でたまふ気色ところせきを、人々端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛の中の源氏の君つくろひたてて、内裏に参らせなどしたまふ。

(『源氏物語』紅葉賀①三二〇-三二一頁)

この場面では、元旦に人形遊びをしていた十歳の「紫の上」が、「紫の上」の部屋にやってきた「源氏」に対して発した言葉である。これまでの二人の会話では「侍り」を用いたことがなく、場所も「紫の上」の部屋であるため、公的な場でもない。

「源氏」と「紫の上」のやり取りを見てみると、「源氏」は「今日よりは、おとなしくなりたまへりや」と話しかけている。これは、「大人らしくなったか」という意味の問いである。これを受けて「紫の上」が傍線部の発言をしたと考えると、「紫の上」は大人っぽく話そうとした結果、大人がよく用いる「侍り」を用いたと考えられるのではないだろうか。このように、傍線部の「紫の上」の発言は、「侍り」が「大人」が使う語として認識されていることがよく分かる例である。

また、「七～十三歳」では、「内的情態動詞」が二例見られ、「一～六歳」では見られなかった用法である思考内容を受けて「～と思す」と続く「思す」が見られた。

㉑男君たち(十歳と八歳)「まろらをも、らうたくなつかしうなんしたまふ。明け暮れをかしきことを好みてものしたまふ」

(『源氏物語』真木柱③三九六頁)

㉒小君(十二、十三歳)「いかにかひなしと思さむ」

(『源氏物語』帚木①一一〇頁)

「大人」では、「七～十三歳」と同様に「侍り」がもっとも多く見

られる。「侍り」のほかにも、「かしこまりの語法」の動詞である下二段活用の「給ふ」「まかる」「まかづ」「申す」が見られる。最高敬語の種類もさらに増えており、これらの語は成長するにつれて習得していく語であることが分かる。

㉓惟光(大人)「私の懸想もいとよくしおきて、案内も残る所なく見たまへおきながら、ただ我どちと知らせてものなど言ふ若きおもとのはべるを、そらおぼれしてなむ隠れまかり歩く。いとよく隠したりと思ひて、小さき子どもなどのはべるが、言あやまりしつべきも、言ひまぎらはして、また人なきさまを強ひて作りはべり」

(『源氏物語』夕顔①一五〇頁)

㉔惟光(大人)「げに、愛敬のはじめは日選りして聞こしめすべきことにこそ。さても子の子はいくつか仕うまつらすべうはべらむ」

(『源氏物語』葵②七三頁)

これらをまとめると、『源氏物語』の「子ども」の動詞の使用率の特徴は以下の通りである。

(1)「一～六歳」は、基本的に謙譲語が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(2)「一～六歳」は、最高敬語が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(3)「一～六歳」は、「侍り」などのかしこまった場面などで用いられる動詞が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(4)「一～六歳」は、基本的に「内的情態動詞」が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

五　二作品の比較

二作品の共通点は以下の通りである。

(1)「一～六歳」は、基本的に謙譲語が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(2)「一～六歳」は、最高敬語が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(3)「一～六歳」は、「侍り」などのかしこまった場面などで用いられる動詞が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

(4)「一～六歳」は、基本的に「内的情態動詞」が見られず、年齢が上がるにつれて用いるようになっていく。

このように、二作品の「子ども」の動詞の使用率の特徴はおおよそ一致しており、二作品の間で「子ども」が用いる動詞の語彙のイメージは一致していたと考えられる。

ただ、すべての「子ども」が(1)～(4)に当てはまった動詞を用いていたわけではなく、五歳や六歳のような年齢区分の境界にいる「子ども」のなかには、一つ上の年齢区分に近い言葉遣いをする「子ども」が見られた。先述した『うつほ物語』の「いぬ宮」(六歳)や『源氏物語』の「匂宮」(五歳)がこれに当たる。

ただし、境界にいる「子ども」のすべてが一つ上の年齢区分に近い言葉遣いをするわけではない。他の「子ども」よりも聡明で大人びた「子ども」であったり、真面目な場面できりりとした表情でいる場合であったりする時に、このような言葉遣いを用いるのであろう。

六　研究の成果

研究の成果として三点挙げられる。

一点目は、平安時代の物語作品に登場する「子ども」と「大人」の言葉遣いが書き分けられていることを動詞の語彙の観点から明らかにできたことである。

実際に、当時の「子ども」がどのような言葉を話していたかは分からず、現在の役割語で見られるような誇張的な表現があるとも言い難い。そのため、本研究で見られた「子ども」の言葉遣いの特徴が金水の定義する役割語に当てはまるのかは検討が必要である。

しかし、物語作品はフィクションである。作品の中で見られる「子ども」の言葉は、現実で「子ども」が話している言葉をそのまま写し取ったものではなく、作者が思い描く「子ども」の言葉が描かれている。

ここから、平安時代において現代の役割語で見られるような誇張的な表現はないものの、子どもらしい言葉遣いというものが存在していたと考えられるのではないだろうか。

二点目は、平安時代における物語作品に登場する「子ども」の言葉遣いの特徴を動詞の語彙の観点から明らかにできたことである。今回の成果と待遇表現の分析をした石田(二〇二一)を合わせることで、作品を解釈するにあたって一つの視点になると考えている。

例えば、ある場面において、普段は子どもらしい言葉遣いを用いている子どもが大人のような言葉遣いをした場合、そこに作者の表現意識が読み取れる。子どもが大人ぶっていたり、きりりとした顔つきで答えていたりしている様子を、発言から読み取ることができるようになるのではないだろうか。

反対に、大人が子どもらしい言葉遣いをした場合は、甘えた様子や酔っぱらった印象を読み取ることができるだろう。

ここで改めて、研究対象から除いていた幼少時代の「仲忠」の発言を紹介する。

○仲忠(六歳)「しばし待ちたまへ。まろが命断ちたまふな。まろは孝の子なり。親、はらからもなく、使ふ人もなくて、荒れたる家に、ただ一人住みて、まろがまゐるものにかかりたまへる母待ちてたてまつれり。里にはすべき方もなければ、かかる山の木の実、葛の根を取りて、親にまゐるなり。高き山、深き谷を下り上り、まかり歩きて、朝にまかり出でて、暗うまかり帰るほどだに、うしろめたう悲しくはべれば、かかる山の王住みたまふとも知らで、この木のうつほに母を据ゑたてまつりて、芋一筋を堀り出でてもまずまゐらむ。また遠き道をも、親のためにとまかり歩けば、苦しうも覚えねど、つれづれと待ちたまふらむも悲しうはべれば、近く、と思ひたまへて、見はべりつるなり。されど、かく領じたまひけるところなれば、まかり去りぬ。空しくなりなば、親もいたづらになりたまひなむ。おのが身の中に、親を養はむに用なきところあらば、施したてまつるべし。足なくは、いづくにてか歩かむ。手なくは、何にてか木の実、葛の根をも掘らむ。口なくは、いづこよりか魂通はむ。腹、胸なくは、いづくにか心のあらむ。この中にいたづらなるところは、耳の端、鼻の峰なりけり。これを山の王に施したてまつる」　(『うつほ物語』俊蔭①七六頁)

この発言は、普通の「子ども」よりもはるかに多い発言量からも分かるように、『うつほ物語』で見られた「一～六歳」の発言と比べるとかなり異質である。一人称代名詞「まろ」で子どもらしさを残しつつも、他の「子ども」が用いにくい「侍り」などの「かしこまりの語法」の語群、「内的情態動詞」などを使いこなしており、『う

つほ物語』において幼少時代の「仲忠」がいかに他の「子ども」と異質な描かれ方をしているかがよく分かる。

このように、子どもらしい言葉遣いを把握しておけば、異質な描かれ方をしていることにも気づくことができるだろう。

三点目は、石田(二〇二一)の記述に疑問を呈することができたことである。石田(二〇二一)は、「『うつほ物語』よりも『源氏物語』の方が、大人と子どもの言葉を書き分ける表現意識が強いと考えられる」[12]と述べている。

しかし、これは待遇表現だけを見て出した結論である。今回の動詞の語彙の観点では、二作品とも同じように「子ども」の動詞の語彙を用いており、『源氏物語』の表現意識が特に強いというわけではなかった。

そのため、石田(二〇二一)の記述については、待遇表現や動詞の語彙の観点だけでなく、さらに幅広い観点を分析したうえで全体的な視点から判断することが必要となってくるだろう。

注

(1) 金水(二〇〇三)二〇五頁

(2) 西田(二〇一六)五九頁

(3) 西田(二〇一六)六一頁

(4) 森野(一九六八)二頁

(5) 森野(一九六八)七頁

(6) 石田(二〇二一)十一頁

(7) 服藤(二〇〇四)によると、皇子や皇女が天皇と初めて対面する対面儀が行われる年齢は七歳であり、当時は七歳から童殿上が許されていたようである。そのため、年齢区分を七歳で区切りとし、「一～六歳」「七～十三歳」と設定した。

(8) 作品内において「仲忠」は、兜率天の内院の衆生七人の内の生れ代りである「変化の者」(『うつほ物語』俊蔭①七四頁)であるため、とても成長がはやく、三歳で母の乳を拒否し、五歳で母を養おうと奮闘する聡明さが描かれている。父親である「兼雅」と対面した際には、当時十二歳であったのにもかかわらず、「ほど十五、六ばかりと見えて」(『うつほ物語』俊蔭①九十二頁)と、実際の年齢よりも言動が大人びていることが分かる描写もされている。

(9) 工藤(一九九五)による動詞の分類の一つ。工藤は、動詞をアスペクト対立の有無の観点から、「外的運動動詞」「内的情態動詞」「静態動詞」の三つに分類している。(四十五頁)この中の「内的情態動詞」とは、「「思う、考える、信じる、心配する、驚く、感じる、見える、疲れる」のような、思考・感情・知覚・感覚を表す一群の動詞」(四十四頁)である。

(10) 杉崎(一九七一)は、「かしこまりの語法」について「身分の下の者が上の者に対して、かしこまってものを言う、また、高い身分の者同志であっても、あらたまったものの言い方をする、というような場合に特に用いられる言い方や用語のあるまとまり、ぐらいの気持である」としている。(二二九頁)

(11) 杉崎(一九七一)二四九頁。

(12) 石田(二〇二一)七頁。

(13) 石田(二〇二一)十一頁。

参考引用文献

・森野宗明(一九六八)「平安時代の言語作品に見出される子供のことば使いについて」『青山学院女子短期大学紀要』二二巻

・杉崎一雄(一九七一)「かしこまりの語法―源氏物語を中心に―」『金田一博士米寿記念論集』三省堂
・工藤真由美(一九九五)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
・金水敏(二〇〇三)『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店
・服藤早苗(二〇〇四)『平安王朝の子どもたち　王権と家・童』吉川弘文館
・山田忠雄ほか(二〇一二)『新明解国語辞典　第七版』三省堂
・西田隆政(二〇一六)「役割語史研究の可能性―平安和文作品での検証―」『国語と国文学』九三巻
・石田芽衣(二〇二一)「平安時代における役割語としての子どもの言葉　―待遇表現に着目して―」『論叢国語教育学』十七巻

調査テクスト

・中野幸一(一九九五)『新編日本古典文学全集十四　うつほ物語①』小学館
・中野幸一(一九九五)『新編日本古典文学全集十五　うつほ物語②』小学館
・中野幸一(一九九五)『新編日本古典文学全集十六　うつほ物語③』小学館
・阿部秋生ほか(一九九四)『新編日本古典文学全集二〇　源氏物語①』小学館
・阿部秋生ほか(一九九五)『新編日本古典文学全集二一　源氏物語②』小学館
・阿部秋生ほか(一九九六)『新編日本古典文学全集二二　源氏物語③』小学館
・阿部秋生ほか(一九九六)『新編日本古典文学全集二三　源氏物語④』小学館
・阿部秋生ほか(一九九七)『新編日本古典文学全集二四　源氏物語⑤』小学館
・阿部秋生ほか(一九九八)『新編日本古典文学全集二五　源氏物語⑥』小学館

(広島大学大学院博士課程前期修了)